

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520228

研究課題名(和文)モダニズム文学における身体と人間関係の機械化に関する研究

研究課題名(英文)Research on the mechanisation of the body and human relations in modernist literature

研究代表者

田尻 芳樹(Tajiri, Yoshiki)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：20251746

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：モダニズム文学、芸術において顕著な、新興テクノロジーと人間の新しい関係が、身体および人間関係の表象にどのように表れているかを探究した。特に、伝統的な道化二人組という形象が20世紀に入ってウィンドム・ルイスやサミュエル・ベケットのように機械に多大な関心を寄せた作家の作品においてどのように変容したかを、ベルクソンの喜劇論、チャップリンやキートンの喜劇映画、フレドリック・ジェイムソンの「疑似カップル」論などをふまえながら考察した。

研究成果の概要(英文)：I explored how modernist literature represented the body and human relations in new ways, inspired by the reorganised connections between the human and newborn technologies. I focused especially on the way authors like Wyndham Lewis and Samuel Beckett, who were keenly interested in the mechanisation of the human, transformed the traditional figure of the pair of clowns. I discussed this subject in relation to Bergson's idea of comedy, Chaplin's or Keaton's film comedies and Fredric Jameson's views of the 'pseudocouple'.

研究分野：イギリス文学

キーワード：機械化 身体 モダニズム 二人組

1. 研究開始当初の背景

私は以前からサミュエル・ベケットを中心にモダニズムとテクノロジー、身体の関係性を研究してきた。ベケットの作品には機械化した人間がしばしば登場し、また彼自身ラジオ、映画、テレビなど複数のメディア・テクノロジーで自分のヴィジョンを表現することに積極的であった。こうした側面は、マクルーハンの直弟子だったヒュー・ケナーによってすでに1960年代に指摘されてはいたが、近年の新しい研究動向をふまえた議論は十分でなかった。拙著*Samuel Beckett and the Prosthetic Body: The Organs and Senses in Modernism* (Palgrave Macmillan, 2007)は、その欠を補う研究成果であった。今回の研究は、その延長線上に、対象をモダニズム全般に広げ、特に身体と人間関係の表象が20世紀初めのテクノロジーの進展とどのようにかかわっているかについて問題意識をさらに深めたものとなる。

2. 研究の目的

本研究は「モダニズム文学における身体と人間関係の機械化」に関して独自の研究を行なうことを目的としている。20世紀初めにヨーロッパの大都会を中心に花開いたモダニズム・アヴァンギャルド芸術が、19世紀後半以降に登場した新しいテクノロジー（蓄音機、電話、映画、ラジオ、自動車、飛行機）と密接な関連を持っていることは広く知られている。新しいテクノロジーは、人間の世界認識を変え、また、感覚、身体をも変容させた。本研究は、特にこの時代に顕著になった人間身体の機械化について新しい視点から研究すると同時に、それと関連する人間「関係」の機械的還元（とりわけウィングダム・ルイスやサミュエル・ベケットの作品に顕著に見られる「疑似カップル」(pseudo-couple)という表象)という未開拓のテーマにも果敢に踏み込み、合わせてモダニズム文学における人間の機械化の表象について総合的な理論を練り上げようと試みるものである。

3. 研究の方法

(1) ベケット、ルイスにおける身体と機械化について、その具体的なあり方と、背後にあるロジックを同時代のコンテクストとの関連で明らかにする。ベルクソン、イタリア未来派、チャップリンなどに注意する一方で、ロシア構成主義、ドイツのパウハウスなど、人間身体と人間関係の機械化を志向した同時代の芸術運動にも十分目配りする。

(2) 人間「関係」の機械化について、「疑似カップル」という概念をより広い視点からも再検討する。カーニヴァルや道化との関係、19世紀的「分身」との関係、ジェンダー論的に見た場合の男性性の問題を含め、世界でもまだ誰も着手していない、定義づけと概念化を試みる。

(3)(2)と合わせて、ベケット、ルイス以外の「疑似カップル」に縁の深い作家たち（フローベール、ワイルド、コンラッド、ロレンス、大江健三郎など）について、それぞれ研究し、一種の系譜を作成する。その上で、なぜこの系譜がモダニズム期に特に重要になったのか、それがモダニズムにおける人間身体、人間関係の機械化とどのように関係しているのか、といった最も核心的な問題の解明に迫る。

4. 研究成果

(1) ベケットとルイスの比較研究を深めた。ベケットから見てルイスは、師匠ジョイスの宿敵だったため、直接の影響関係があったとは考えにくい。しかし、ルイスは身体および人間関係の機械化という点において明らかにベケットの先行者だったと考えられる。ルイスは、人間の動作を執拗に機械的にこわばったものとして描写することから風刺的笑いを喚起する手法をとった。ベケットにおいては、風刺性は弱いもののやはり、人間身体とグロテスクな機械性で黒い笑いを引き起こすことが多い。ここからは、笑いは人間が機械的側面を露呈するときに喚起されるというベルクソンの『笑い』、および20世紀初めに笑いと言語のテーマ系の結節点として（ルイス、ベケットを含む）多くの芸術家の注意を引いたチャップリンに対して二人が取った態度がいかなるものだったかという視角が生じる。この点に関してルイスの『ワイルド・ボディ』、『ター』、『チルダマス』をベケットの諸作品、およびマイケル・ノース『機械時代の喜劇』(2009)を参照しつつ考察した。その成果は下に掲げた2本の論文に反映されている。

(2) さらに重要なのは、ルイスとベケットが「疑似カップル」と呼ばれる機械的な二人組の登場人物をともに用いたことである。これは、ベケットが『ゴドーを待ちながら』に登場する二人組の原型としての自作『メルシエとカミエ』について用いた用語だが、フレドリック・ジェームソン『攻撃性の寓話』(1979)によって、フローベールの『ブヴァールとベキュシェ』やルイスの『チルダマス』に登場する二人組をも包摂するような文学史的概念として流通するようになっている。簡単に言えば、独立した人格を持ちきれず、互いによりかかるように不即不離の関係を保ち、また互いを機械的に反復し合うような平板で心理的奥行きを欠いた二人組のことである。このような人間「関係」の機械化がどのように生じたのかを考察するため、なぜ、事実上無関係だったルイスとベケットがこの「疑似カップル」という同じ形象を用いたのかという問いに取り組んだ。それを直接扱ったのが2013年に発表した論文'Wyndham Le

wis's Pseudocouple: *The Childermass as a Precursor of Waiting for Godot* である。ここでは(1)で述べた問題の他、後期モダニズムにおける人間性の縮減への関心を二人が共有していたことも論じた。結局互いに独立しえない疑似カップルという二人組は、本来複雑であるはずの人間関係を最も単純な単位に縮減したものに他ならないからである。その背景には、19世紀以来の産業資本主義の展開、20世紀の新メディアによる世界のシミュラクル化、機械的反復と模造の遍在というルイスが小説や評論で描き出し、ベケットが(人間を最小要素に還元しながら)取り組んだ問題が存在していることも指摘した。

(3)しかし、「疑似カップル」という形象の特質は、それが伝統的な道化二人組が20世紀においてどのように変容したかという角度からも探究しないと不十分である。そのために道化論というジャンルに手を染めた。その過程ではウィリアム・ウィルフォード『道化と錫杖』のような刺激的な書物に出会うことができたものの、ジャンルの広大さを前にして十分な研究ができずに終わっている。

(4)「疑似カップル」は19世紀の小説で栄えた「分身」とはどう違うのか、という必然的に生じてくる問題に答えるべく、その両者を作品で扱ったコンラッドを考察した論文を執筆した(未発表)。しかし、考えてみるとオスカー・ワイルド、ウィンダム・ルイス、ベケットも両方を扱っているのであり、19世紀的「分身」から20世紀的「疑似カップル」へ移行する過渡期で彼らは書いたのではないかという仮説を立てることができた。しかしその仮説を十分に検証することが期間内にはできなかった。

(5)また「疑似カップル」がいつも男性二人組なのは19世紀末から20世紀初めにかけてのジェンダーの再編成とどうかかわっているのか、という問いに答えるため2013年にこれをテーマにした学会発表を複数行った。結局それはイヴ・セジウィックの「男性同士の絆」という概念を用いてある程度説明できることを論じた。これらの学会発表を簡潔にまとめた日本語論文を執筆し、ある論文集のためにすでに提出したがまだ公刊には至っていない。

(6)2012年の学会発表で論じたように、「疑似カップル」という形象は、喜劇と機械化というモチーフの他に19世紀後半以降重要になるニヒリズムの思想とも深く関係していることを発見した。つまり、人間存在、人間関係を操り人形のごとく機械的に表象する

背景には、世界の虚無の感覚があると思われる。それは、フローベール、ルイス、ベケットに共通している。

(7)以上のように、特に「疑似カップル」という形象について多角的に研究し、未公開論文も含めかなり成果を上げることができた。国外においても積極的に成果を発表し、それはおおむね好意的に受け止められた。したがってこの研究の世界的な独創性には自信を持つことができている。しかし、1冊の書物として公刊するという当初の計画は期間中に実現することができなかった。以下、それを実現するための今後の課題と展望を記す。

20世紀に入って文学、芸術にただならぬ影響を及ぼした映画というテクノロジー、とりわけ喜劇映画の重要性について、マイケル・ノースらの研究を乗り越えてゆくような切込みが必要である。

「疑似カップル」の源泉としての道化研究。たとえば『ドン・キホーテ』の二人組の持つ深い意味合いは何か。それが正気と狂気、存在と虚無といったテーマとどうかかわっているか。そしてそれが20世紀にどう変容したか。こうした大きな問いに取り組む必要がある。

サミュエル・ベケットの作品には二人組が遍在しているが、『メルシエとカミエ』と『ゴドーを待ちながら』のように明確に「疑似カップル」と呼べるものもあれば、『ワット』のサムとワットのように「分身」に近いものもある。これらの関係についてもっと明らかにすることができれば、ベケットについて、あるいは二人組の20世紀的変容についてさらに理解が深まるはずである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0 件)

[学会発表](計 5 件)

田尻芳樹、「pseudocouple の先祖たち 道化、機械、セクシュアリティ」、第41回日本サミュエル・ベケット研究会例会、2013年7月6日。東京工業大学、東京都目黒区。

Yoshiki Tajiri, 'The Sexuality of Beckett's Pseudocouples'. English Department Research Seminar at the University of Bristol. 1 May 2013. Bristol (UK).

Yoshiki Tajiri, 'The Pseudocouple and Sexuality -- Rereading *Mercier and Camier*'. Samuel Beckett: Debts and Legacies Seminar Series. University of Oxford. 30 April 2013. Oxford (UK).

Yoshiki Tajiri, "Rethinking the Pseudocouple – Comedy, Mechanization and Nihilism". Beckett International Foundation Research Seminar at the University of Reading on 28 April 2012. Reading (UK).

Yoshiki Tajiri, "Beckett and Wyndham Lewis: The 'Pseudocouple' in Modernism", (25 June 2011) Samuel Beckett: Out of the Archive, 23-26 June 2011, University of York. York (UK).

〔図書〕(計 2 件)

(共著) Yoshiki Tajiri, 'Wyndham Lewis's Pseudocouple: *The Childermass* as a Precursor of *Waiting for Godot*'. *Samuel Beckett: Debts and Legacies: New Critical Essays*. Ed. Peter Fifield and David Addyman. London: Bloomsbury, 2013. pp.215-38.

(共著) 田尻芳樹、『『チルダマス』における亡霊 / 映画 / 存在論』、富士川義之、結城英雄編『亡霊のイギリス文学 豊穣なる空間』、国文社、2012年8月。pp.283-293.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田尻 芳樹 (TAJIRI, Yoshiki)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号: 20251746